

Caroline Walker Bynum, *Wonderful Blood: Theology and Practice in Late Medieval Northern Germany and Beyond*, Philadelphia: University Pennsylvania Press, 2007, 448 p.

キャロライン・ウォーカー・バイナム
『驚異の血——中世後期北ドイツの神学と
実践を越えて——』

三 浦 麻 美

中世後期のヨーロッパに現代と異なる信仰が見られたことは、ホイジンガが『中世の秋』で指摘している通りである。この時期の心性については近年、新たな解釈が試みられているが、ここではアメリカを代表する中世史研究家、キャロライン・ウォーカー・バイナムの2007年の著作を取り上げる。バイナムは1941年に生まれ、ハーバード、ワシントン、コロンビア大学を経て、現在はプリンストン大学のヨーロッパ中世史高等研究所の教授を務めている。代表作としてここでは2冊を挙げておく。*Holy Feast and Holy Fast: The Religious Significance of Food to Medieval Women* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1986) では、13世紀の女性聖人伝記述から食物に対する態度を分析した。中世へのジェンダー史的アプローチが有効であると示した点で、画期的な著作である。また *The Resurrection of the Body in Western Christianity, 200-1336* (New York: Columbia University Press, 1995) は聖書釈義や神学、美術を通じて身体の復活に関する中世の教えの発展を追い、魂・身体の二元論ではなく、魂と身体の両方から成立していたと考えられていたことを指摘した。このように、バイナムはキリスト教思想に関する書物や美術作品を駆使して中世の宗教における思想や信仰

の実践について、身体やジェンダーといった視点から論じてきた。

本書は「長い 15 世紀 (1370 年代～1520 年代)」の北ドイツを対象に血への熱狂とその根底にある心性を論じる。この時期は出血する聖餅の幻視や聖血による奇蹟など、血を媒介としたキリストへの信仰がヨーロッパ各地で見られた。バイナムはその中でも従来考察されることの少なかったメクレンブルク、ブランデンブルクといった地域を取り上げ、描写の生々しさに注目しつつ神学、典礼、図像といった多様なアプローチから分析し、「なぜ血なのか (Why Blood?)」という問に答えようとする。

第 1 部「北ドイツでの崇敬」においては、マグデブルク近くのウィルスナック (Wilsnack) への巡礼を具体例として、北ドイツで生じた聖血信仰の進展と原因としての地域的特性を考察する。ウィルスナックは 1380 年代に放火された教会の聖餅に血の滴が発見され、奇蹟が生じた。これをきっかけに各地から巡礼者が集まるようになり、16 世紀半ばまではエルサレム、ローマ、サンチアゴ・デ・コンポステラと並び称された。しかしフスやエアフルト大学の神学者たちが聖遺物としての聖血を認めずに巡礼を非難するなど、信仰の是非を巡ってローマ教皇をも巻き込んだ論争となったが、最終的には宗教改革導入後の 1552 年福音派に問題の聖餅が焼却され、終わりを告げた。ウィルスナックの聖血崇敬は地域の政治・経済的文脈から検討されてきたが、バイナムはこの論争の当事者たちが立場に関わりなく「血」に宗教的重要性を見出していたとして、宗教的側面に注目した。すなわち、拷問や傑刑で体外に流出したキリストの血が聖性を保ちえたか、滴として分離した血をどのように評価するかという解釈が対立したのであり、15 世紀の社会は全般として血に取りつかれていたのである。聖血信仰は南ドイツに特徴的とされてきたが、ウィルスナック周辺にも聖血の存在を喧伝する試みがあり、北ドイツにも見られるとする。ただしその性質には年代によって違いがあり、13 世紀の聖血は神の介入により出現した聖遺物として崇敬されたが、15 世紀末には虐待された聖餅から流出する血となった。この虐待者をユダヤ人とする言説が発展したことが、中世末期に生じたユダヤ人迫害の一因となったのである。

第 2 部「15 世紀ヨーロッパにおける血の論争とその背景」は、血とそ

のコンテクストについて神学的背景から論じる。中世後期における聖体信仰の高まりはよく知られているが、「聖餅に出現する血」には聖体の変化をめぐる議論と関連して特殊な意味があった。俗人は通常キリストの血を象徴する聖杯に触れる機会がなく、聖餅がキリストの肉と血の両方を象徴する役割を果たしたために、そこから流出する血は生きており、奇蹟によるキリストの顕現とされたのである。このような解釈を可能とした背景には13世紀の神学者、ロバート・グロステストやボナヴェントゥラ、トマス・アクィナスらの身体の復活をめぐる議論があった。その延長で15世紀半ばまでにはキリストの身体と聖血の関係、信徒がそこにアクセスする方法に関心を集めたのである。ほぼ同時期キリストの死の3日間 (*Triduum*) における血の状態について托鉢修道会間で論争が生じたが、その背景には聖血の統合と分離のパラドクスがあった。フランシスコ会がキリストから分離した血に聖性を認めて崇敬を擁護したのに対し、全体性をより重視したドミニコ会は否定的態度を取った。しかしこのような差違が見られるとはいえ、キリストの死と聖血を人類の救済の代償とする神学的基盤は共通していた。

第3部「血への信仰の諸前提」は前半の内容をふまえてトピックに沿った論が分析的に展開され、中世後期の北ドイツでパラドクスを内包する「血のシンボリズム (p. 136)」が存在したと指摘する。このパートでは豊富な図像史料に加えて神学書、女性神秘主義者の著作などが使用されており、最も「バイナムらしい」と言えるだろう。この地域における血の崇敬は他地域よりも血の気が多いとし、3つのアプローチから当時の人々の内面を読み取ろうと試みる。最初が不変性であり、聖血が常に赤く、変化に抵抗する点である。神学的論文はキリストの完全性を扱う中で、分離した聖血に生命を与えた。分離したものにアイデンティティを認める同様の傾向は四肢を切断された聖人、殺害された遺体や虐待された聖餅から流出する血などの伝承にも認められる。また「悲しみの人」に見られるように、最終的に聖血はキリスト自身に回帰するものとして復活と結びつけられた。第2のアプローチは生命を与え、生きているものとしての聖血である。この観点から血は豊饒のシンボルとされたが、家門などとは結びつけられない。しかし脇腹の傷口からの出血は女性化することで出産に見立てられ、キリストと幻視者の血の交換により魂の

交流が描かれるなど、宗教的に血は生きているキリスト自身を表すようになった。第3に滴として分離し、死を象徴する側面がある。聖職者には血がタブーだったように、流血を引き起こす行為は非難の対象となりえた。これを端的に表すのは14、15世紀におけるロンギヌスへの批判的描写だが、さらにキリストに流血という代償を払わせた者として、信徒に罪悪感ももたらした。このように、15世紀における血は生死両方を表すパラドクスとして機能していた。そして血に対してより積極的に関わろうとする女性神秘主義者らにより、キリストの血による救済を「犠牲」とする言説が発展したのである。

第4部「犠牲と救済論」は犠牲という観点から、それまで使用した史料に再検討を加えている。まずバイナムは12世紀の神学の中世後期への影響を指摘し、ベルナルド、アベラール、アンセルムスらは共通してキリストの血は信徒に何らかの反応を促すものであり、贖いとしての血は神の選択と考えていたとする。分離と統合のパラドクスを援用すると個々の信徒は聖血と同様にキリストに包摂され、救済への参加が可能となる。キリストの血は救済の代価・模範だが、全体的な理解には犠牲という観点が必要となる。それを神学的に考察すると、教父や旧約聖書まで遡る。典型的な犠牲が語られるのはレビ記だが、教父たちは「ヘブライ人への手紙」に基づき、犠牲者も行為者も共に神であるとして寓意的に解釈した。しかし中世に聖体拝領をめぐる議論が発展する中で、トマス・アクィナスらは「血を伴う犠牲」という考えに直面した。ここで血には消極的価値が与えられたが、血の必要性には疑念が抱かれず、宗教改革後も継続した。その一方で信徒はキリストの犠牲への罪悪感を抱き、犠牲と殺害を切り離すことでこれを克服しようと試みた。中世後期のユダヤ人迫害にはこのような要因もあった。キリストの犠牲の強調は複雑な効果をもたらし、1回の犠牲が永遠性を持つというパラドクスを顕著にした。そして神意がこのパラドクスを可能としたために人類はキリストの血で浄められ、救済されうると考えられるようになったのである。

中世後期の北ドイツにはキリストの血は流血する聖餅の伝承や血をめぐる奇蹟、聖血崇敬に基づいた巡礼といった様々な形で現れていた。これらは伝承や論争の記録、信仰や神学に関する文書から読み取れるが、常に生と死のパラドクスと密接に結びついていた。個々の出来事は地域

史、神学、図像学、ジェンダー史といった異分野に属すと考えられてきたが、バイナムは血への崇敬・熱狂の分析を通じてそれらが共通の基盤の上に成立していたと指摘する。そして「なぜ血なのか？」という問いには「自然のシンボルとしても崇敬の対象としても、血は15世紀キリスト教の願望と不安を他のものには不可能な程に縮約・喚起し (p. 257)」ため、と答える。

以上が本書の概要である。バイナムが認めている通り本書で論じられる現象や史料はしばしば取り上げられ、先行する著作でも使用されてきた。しかし、例えば冒頭で取り上げられたウィルスナックの聖血崇敬は地域の政治・経済事情から研究されてきたが、新たなアプローチを試みることで「血への熱狂」という宗教的要素があぶり出された。このようにバイナムは一貫して周知の出来事でも解釈により全く異なる側面が現れることを指摘しており、新たな研究分野が展開する可能性を提示した点は高く評価できる。

また本書のもう1つの特徴は対象地域を北ドイツとしたことである。中世後期の宗教については南ドイツの研究が圧倒的に多く、北ドイツは潜在的プロテスタントの地域とされ、聖血崇敬のような「カトリック的」現象に注目される機会は少なかった。しかしバイナムは敢えてこの地域に注目することで宗教改革後も血への信仰が継続したと指摘する。中世から近世への転換において、ここで見たように完全な断絶が生じたわけではないことは今後考慮に入れる必要があるだろう。

ただしいくつか気になる部分も見られた。ここでは2点を挙げておく。1つは史料や例として考察する人物と地域の関係に曖昧さがある点である。確かに図像史料のほとんどは北ドイツに存在しているが、神学テキストの分析で多く言及されたトマス・アクィナスやボナベントゥラはヨーロッパ全域に影響を与えており、シエナのカタリナなども同様である。本のタイトルの通りに北ドイツの地域的特性を強調するならば、これらのテキスト受容への反映の有無も知りたいところである。またバイナムは図像に基づいて「北の受難の描写では特別な血 (particular brutality, bloodiness) がある (p. 136)」が、南で描写される血はより象徴的だとしてイタリアの例を引くが、これにより比較対象とする地域の印象が曖昧になった点は否めない。

もう1点は対象年代の設定である。特に1370年代が「長い15世紀」の始まりとされるが、この年代で境を設ける根拠を評者は本文中に見出せなかった。聖血崇敬の初期段階として挙げられるのがトマス・アクィナスやボナベントゥラ、ノリッジのジュリアンらであることを考え合わせると、13世紀との違いをより明確にすることで年代設定にも説得力が増すと思われる。

以上、的外れな解釈や指摘が多々あると思われるが、その点についてはご寛容を願うばかりである。なお末筆ながら本書は2007年に American Academy of Religion's 2007 Award for Excellence in the Historical Studies category, 2009年には2009 Günder Prize for the Best Book in Medieval Studies published in 2007を受賞している。本書は中世後期の信仰の考察に有益であるだけでなく、ジェンダー、美術、身体など多様な分野で新たな視点を提示しうる研究であり、幅広く読まれることを期待したい。